

「あなたに照り輝く光」

ルカによる福音書 2章 8節～20節

説 教 本庄侑子牧師

クリスマスの夜、羊飼いたちを天からの光が照らしました。嬉しいことのように思います。しかし、彼らは非常に恐れました。自分の罪が照らし出されたからです。羊飼いたちはこの時、自分たちが神様の前で、どれほどにぶてぶてしい姿で生きてきたかを知り、震えたのです。

御使は言いました。「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。」(10節)神様が天からの光を照らすのは、私たちの正体を暴き、恐怖に陥れるためではありません。私たちを罪の姿から救い出して、「大きな喜び」へと解き放つためです。

御使は4回も「あなたがたのために」と伝えました。「あなた」にこだわる神様の願いが聞こえます。この「あなたがた」は「羊飼いたち」でした。羊飼いは羊を守らなくては罰せられる緊張感の中、24時間働いていた人たちでした。彼らは思っていたことでしょう。神様がいたとしてもここには届かない。あるいは、怒っていたかもしれません。神様がいたら、なぜ自分をこんな目に合わせるのだ。

私たちにもあるでしょう。祈ることも諦めてしまっていること。誰かのせいにはしないでは、いてもたってもいられなくなる。神様がいると言われると心を頑なにしてしまうこと。しかし、そのような羊飼いの心をめがけて、神様はお語りになりました。

羊飼いたちは全ての人の代表でした。あの夜、イエス様は、飼葉桶の中に寝かされました。マリヤもヨセフも、過去に遡っては自分を責め、互いを責め、もう変えることができない現実を前にただただ親として情けなくて、許しをこう思いで赤ちゃんを見つめていたかもしれません。

こうなった原因を聖書はこう伝えます。「客間には彼らのいる余地がなかったからである」。(7節)しかし、今にも赤ちゃんが生まれそうな夫婦を泊めるスペースくらい、工夫すれば作れたと思うのです。あの夜、この世界になかったのは泊まる場所ではなく、彼らのために場所を作ろうと思えた人間でした。

今日の物語は、アウグストによる人口調査から始まっています。アウグストも自分の国や生活を守ることに必死でした。人々も、互いに助け合うのではなく、場所を取り合いました。アウグストも人々も、そんな自分の言動がマリヤを馬小屋へ追いやっているとは、考えもしなかったことでしょう。

先週のページで、劇中のハプニングもあり、羊飼いの世界でも同じようなことが起こっていたのではと思われました。羊飼いは確かに同情すべき境遇だったかもしれませんが。しかし、人のあらを見つけたら、それを責め立てることで発散する。このような境遇に置かれた自分には、それがさも当然の権利であるかのようにのさばろうとする。そんな心に支配されていたのではないかと思うのです。

私たちが抱える最も深い闇は、自分が受けた傷や人の罪には敏感でも、自分の罪に気づかない、気づいても認められないところにこそあるのでしょうか。あの夜、羊飼いを照らしたのは、そのような罪の闇を、照らす光でした。クリスマスは、この世界にどっしりと居座る私たちの罪、私たちの心を鈍らせ、自分に居直らせ、互いに押し合わせ、滅びに突き落とす罪と徹底的に戦うために、神様が来られた日です。

私もかつて、このお方の光に照らされました。礼拝を通して神様は私の正体を暴かれました。しかし、そこで私が出会ったのは、私をそのような姿から救うために、私の代わりに最も深いところで傷つき、もがき苦しみ抜かれた神様でした。そして、聞きました。私が全ての人の罪を贖った。だから、もう罪に居直る生活は終わりにしないか。あなたから始めたい救いの物語がある。私についてきてほしい。そんな神様のみ声を聞きました。21年前のクリスマス、私は洗礼を受けました。罪の自分は葬り去られ、新しい命を頂いて、生まれ変わりました。

もちろんそれで苦しみのない別世界に移されたわけではありません。羊飼いたちも、元いた場所に帰って行きました。しかしもう前と同じではありません。出口のない絶望の中に閉じ込められているのではないことを知ったから。罪深い自分に居直ることも終わったからです。終わりの日、必ず完成される神様の救いの物語の中を、神様の愛と赦しによって、互いに愛し合う世界の中を、生き始めたのです。

同じことが、ここにいる私たちにも始まっています。神様は今朝、あなたにこだわって、あなたに向かって言われるのです。あなたに聞いてほしいことがある。あなたから始めたい救いの物語がある。私についてきてほしい。

(記 本庄侑子)